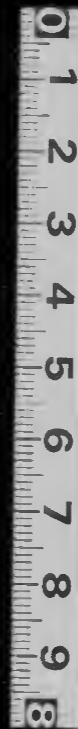


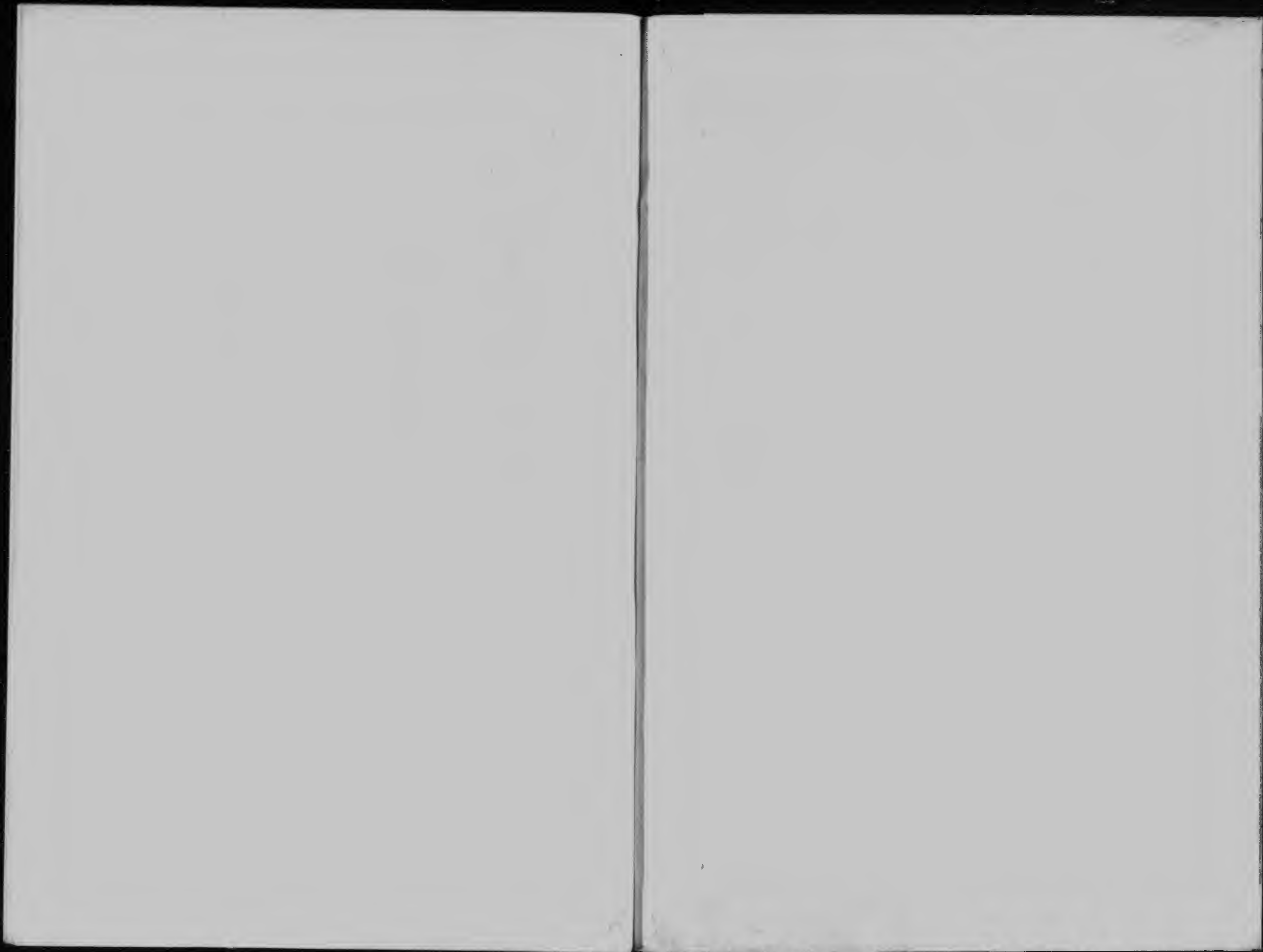
御小帳組四番

三



庫	文	同	内
五	三		和
二	二		書
函	三		
一	九		
二	二		
架	冊	號	類

内閣文庫
番號和
冊數
函號



元文二己年閏五月廿日

右左馬頭弘明忠房

所小姓組三力権津守組

所小姓組松平豊前守組 七右衛門 日根野 左衛門 高信

日高信為要政より八所本城に

止し是組整と令りし

元文六申年三月十六日死す

元文四年六月廿九日

所小性組松平豊前守組 三言依本多正忠公守

後八百石

中書院南高松様御守組平右衛門正忠様

元文四年九月九日申上り電的

御寄書之目十日當申に百石れ

町殿ニと賜

寛文保二年十月十八日平川の書り白

放者せさせぬお村多利毎口十日

百石れと賜

實之宛元禄年四月十日御寄書始乃

射に列し河原に立寄りて
其日射を以て恩賜のたむ
しつゝ明の日に立寄りて美金松と爲り
宝曆五年八月五日家督八百石
是との言依返しし

宝曆七年六月廿三日老辭賜美金松入
石河古作守之死

天明二年八月六日死七十四歳

元文四年六月九日

御書院表弟孫園防守祖十番守御書院
御小姓組松平豊永守祖 三番後 山平守殿守
政 河原

宝曆二年二月九日死四十二歳
又三

元文四年六月十九日

御書院者松平豊元御書院
御書院者松平豊元御書院
御書院者松平豊元御書院

御書院者松平豊元御書院
御書院者松平豊元御書院
御書院者松平豊元御書院

後二子書名

改二子書名

若狭守

寛保二年九月三日御書院二子書名

尾二子書名二返一奉

延享四年四月四日向國延岡城

引渡御用と令書二返二子書名

黄令御用と令書九月十日御書院十月

十月御書院

宝曆六年辛酉月十日 沖使番

日辛酉年正月武別岩槻城と云
出守忠老に川内守用と命せき
九月朔日陽服黄令と揚し十月朔日
揚し相福寺

日辛酉年正月十日布衣と命せき

宝曆七年辛酉月十日甲別津列
惣別東街道の川内防堤修築乃
陽用と命せき二月十日陽服
黄令と河内相福と揚し三月十日
揚し一十月十日布衣と命せき
利根川の堤と換らすと作と命せき

換らすと命せき又甲濃惣東街乃
川内防堤と修築し三月十日陽の
辛酉年正月十日相福と命せき
世及川内と修築し功と命せき
陽のと黄令と揚し

宝曆八年辛酉七月十日小菅信組と死
明和六年辛酉四月十日西の所住組と死
日辛酉年正月十日叙學と命せき若狭と改
安永元年辛酉二月十日御編と命せき
徳島守西紀官乃事首と揚と命せき
命せき二月十日御の所と命せき止
及し作と命せき三月十日御と命せき

中道殿よきまをりしを何の如く
出仕とせむべき作とあつ十月朔日
かんさく

安永元禄年三月廿六日西條の連書院著
記

安永の申年九月廿六日西條の連書院著

同年月廿六日西條の連書院著
合さく

同年十月廿六日西條の連書院著
別荘の
地味傷もそふらんを形つべき作
り

安永七戌年同七月十九日西條の連書院著

東照通し横町ありて古石作の地
別業の地は揚々

安永八亥年二月廿六日西條の連書院著

元文甲申年二月十九日

西元正徳院苗酒井出立長命徳横巻子
沖中姓組松平豊平守組三官儀 御方豊次而徳成

元文甲申年十月廿二日 傳 西元正徳院

日年三月廿二日 布衣系と先(系)

寛保三年二月十九日

後明院殿の沖中納戸

宝曆二年十月廿二日 沖中納戸

うらり芳乃(系) 豊平三時辰ニ

忠為(系)

後 三官儀
大膳

宝曆十一年三月三日御成代連書

明和元年三月三日御成代連書

御用を替へて御物に治す

明和二年三月三日御成代連書

三日俵かかへ奉る

明和六年三月三日御成代連書

安永二年四月三日御成代連書

安永三年三月三日御成代連書

御成代連書

御成代連書

御成代連書

御成代連書

御成代連書

御成代連書

御成代連書

御成代連書

元文申年十二月廿二日

元文三年十二月廿二日

抄本

小宮信恒徳勝帝十帝と云

御小信組人景佐守組 小宮切石系出基

寛延元年八月廿八日丹波國巻山城

引渡所用之金を以て三月廿八日服巻令

板と稱す明の己年二月廿五日湯で浮揚す

宝曆九年三月廿七日死云云九葉

元文六年三月廿二日

元文四年三月廿七日

久米成昭君

少子信組長壽以久壽而死

沖田信組之妻云佐舟也 三喜名鳥亦久壽而忠確

改久米

明和三年三月廿二日死于一

元文乙申年十一月廿二日

寛保十九年三月廿五日

常刀藏瀧春子

出雲信祖阿部信成之宛

出雲信祖阿部信成 二名 仁智保出雲而誠陳

延享二五年六月八日大坂法圓寺の

舎所より七月廿日法眼寺金堂と

楊子咽の宮年三月十八日迄に仰り

口廿二日迄福也

明和七宮年三月廿日拜入塚三帝支死

明和八年八月廿日致仕して口廿日發

切りして春山寺に改

安永三年九月十八日死享年八歳

元文丙申年十一月廿二日

元文丙申年十一月廿二日

十歳在位門以字号也

出雲信祖能野市十郎左衛門

清忠信祖之孫古依守祖

出雲若井氏系永弘前

宝曆十三年六月十三日死享年三歳

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

元文六甲申年七月廿五日

寛保十八壬午年十月廿五日

曲剛下野身景衛書子

小菅信組上景忠白而支記

沖中津組大景去仇守組

子言百

五名 曲剛壬午景福

寛保三亥年八月廿三日死二十四八岁

元文丙申年十月廿三日

享保二十二年九月七日

水野舎人勝隆

少将信組小系新五郎

水野組之奉行守組 于三君 水野内色忠壽

政要人

延享二年十月十七日

延享三年十月廿三日

以本之御書にて事無く勢い

時故にと

明和元申年十月廿三日

日申年十月廿三日

明和二年十月廿七日

明和四十年二月十九日

氏部卿殿沖籠と造りてさき御用と
合せしき三月廿三日御事に當り
して其令を御時服にと給ふ

明和三十年三月廿日行橋左平向
御多門と造りてさき御用と合せし
明の三十年三月八日御事の外はと
り免れ給ひて其令を御時服にと給ふ
明和七十年三月十三日日光に侍り
させし御時服と合せしき

安永元在年二月廿五日目黒の火災
より御城部は余燬かきし御

御時服一切をさき御用御書中に
記し置て御時服と給ふ

同年三月廿三日御時服と合せし
御用と造りてさき御用と合せしき

安永二在年二月九日本殿山

高藏院君
澄明院君乃御時服と造りてさき
公親院君

御用と合せしき三月廿五日御用と
合せしき御時服にと給ふ

安永三年三月晦日本殿と海部御用と
合せしき御時服と御用と合せしき
御時服にと給ふ

安永四年二月廿九日東叡山

三河牌殿本坊法隆寺と造りし

所用と命とせし

口年九月廿日日光の湯旅籠より

御道より一の橋に下りて湯服

御座の間に下りて湯宿とせし

作とせし是日五とせし十月廿日

十日湯宿

安永四年十月廿三日死す九歳

元文六年二月廿日

元文六年七月廿日

安永四年二月廿日

山崎信通古御年三歳と死

御出陣の最中御守組 子名 阿信万の御出陣

致し御守組

寛延二年九月十九日死す十四歳

元文六年二月廿三日

寛保六年三月廿三日

河津組大番左衛門尉 吉原 本目 左衛門尉 長

河津組大番左衛門尉 吉原 本目 左衛門尉 長

寛保元年二月廿三日

元文丙申年七月廿二日

元文丙申年七月廿二日

中山信祖大室左衛門守

吉原日根野左京高兼

日根野左京高信忠从

山菅信祖能勢守市而主宛

改字力

寛保三年七月廿二日瑞野中後

省て四の五日菅原八百三十七番令

如左

同申年四月廿六日護持院の度少く

小的中後省て瑞野と云

同申年十月廿六日瑞野中後省て瑞野

と云

延享四年八月廿一日孫村清経が
明の壬子日官甲子日とて其命を
終る

天明二年二月廿日老釋楊美全入永井屋物屋死
日辛二月廿七日死七十一

元文六年十月廿二日

元文四年九月九日

中津師勝央中津子

菅原信組阿部信成

御代組大老去佐守組 菅原 松平清而勝友

宝曆十二年九月廿九日解入高力或部と死

宝曆十二年十月九日死七十九

元文五年十月廿二日

元文五年七月廿三日

延享二年八月廿三日

延享二年八月廿三日

亦性組右衛門守組之若 高井藤太郎出房

致延享二年

延享二年十月十三日拜入之御免御免

延享二年八月廿三日致仕

宝曆六年八月廿三日死年七十一

二月廿一日百石出使

元文五申年二月廿一日

享保八年三月廿一日

友之進出及養子

少重信祖阿部侯威之死

御小姓組之圖在依守組

之字右 夏目忠兵衛時

宝曆九年正月廿二日死 早中書

寛保二年三月三日

新書組近衛中納言政房
御出仕組長左守組 三儀 近衛千三郎政房

後 播磨守
外記

寛保三年四月十八日 經 西丸通御座

同 八月三日 西丸の御出仕

延享二年九月朔日 西丸御座

連々々々乃御座

同 年十月廿日 叙 西丸御座 播磨守 政

宝曆二年三月九日 海 播磨守

勢のうらまれのころ 西丸御座

先き色も多分は列す
宝曆八年八月晦日猶麻後つ
のりたるは悪願と陳きも。新ひを
おとせし唐末三音儀とていへり
日辛國司と名あり事々懼れり
ゆゑにそ印作て致
宝曆九年辛丑月家か〜てはた
あ〜に

寛保二戌年三月三日

右書組の三箇字を傳り守勝也

清水姓組右書儀守組 三音儀三田集三進守友

後書名

後書名傳り

宝曆六年辛巳月廿四日海内書名是也の

三音儀ハ〜一奉り

明和七年三月七日

淨宗院標御用人

日辛四月十八日布衣志と名あり

明和八年辛丑二月廿七日死す

寛保三年九月八日

寛保三年十月有詔

平十帝守滿春子

小岩後祖去冬平三帝之死

河内性祖之墓云佐守祖于岩水野多合守鑑

宝曆九年三月廿七日移入教深基平帝之死

宝曆十年九月廿六日致仕其水と云

天明八年七月廿八日死守宗

寛保三年九月八日

元文四年六月廿四日

織部忠吉春子

出雲守組下家康子

出雲守組下家康子 子石 本多之次郎忠儀

宝曆三年二月十八日死三十一歳

寛保三年九月八日

寛保三年六月二日

河内性頼右衛門

子右 押田万三郎

忠源而佳勝養子

山崎信頼出宗新系と死

改名右馬 信信守

延享二年十一月廿一日

村山六郎一四股を揚る咽のせり

菅中に百まきく美衣をたし揚る

口辛十月十七日進物番

延享二年八月三日

口辛十月二日

後明院殿の河内性

日年三月十八日有春志とあり

宝曆元未年二月十六日西御所より
陽始の射に到り乙未御免有て
時服ニと揚る此后を及ばし事と
暫て必時服ニと揚る

日年三月廿日時位に傳へて
鳥羽殿明世旨時服ニと揚る

宝曆二申年二月廿日

清明院殿の時位を時全候の時位
とて美令と揚る是事小
旨とにやうとあり

宝曆十未年四月朔日時位を時全候とあり

宝曆十未年二月朔日

竹久代君乃時方とあり

宝曆十未年四月廿日時位乃
時用とありし四月七日時服ニと
揚る

明和元申年二月朔日

竹久代君の時位を時全候の時位とあり
時服ニと揚る

明和二年四月廿日時位を時全候の時位
とありし四月廿七日
時位を時全候の時位とありし四月
廿七日とあり

明和三年五月七日沙院の建御
より〜時辰と揚る

明和三年五月廿九日沙院の建御
曰年三月廿八日新御内侍より後徳吉と
り〜と

安永三年五月廿日

孝泰院殿の御旨を沙院に事と
替り〜と揚る

安永三年五月廿日宮中より
陽始の射日に連りて時辰と揚る

曰年五月

後明院殿日老〜と揚る

曰十日武判岩根の御詔を沙院より
より〜と揚る
十三日岩根より〜と揚る
台頼と揚る〜と揚る
揚る西院より〜と揚る

曰年六月二日

孝泰院殿の御旨を沙院に事と
〜と揚る

西院より〜と揚る

安永八年五月廿一日流石〜と揚る
列〜と揚る

日辛卯月十三日湯先弓次

安永九年八月八日

若菜三郎の筆書と勢りしと時辰
二と傷り

天明八甲年二月五日

清明廟の筆書と勢りしと時辰と傷り

寛政七年二月五日老祥時辰と傷り

傷り勢りしと

寛政八年二月十九日致仕と料二と傷り

寛政九年八月五日年七十七歳

寛保三年九月八日

元文元年九月九日

中書省書寫

小書後祖永井監物と記

河小住祖永井監物と記

台書二日二歳と記

後中書

宝曆八寅年七月八日祥入太保監書と記

明和八年二月五日致仕と後致仕

和らしと全りと記

享和二年三月五日死と年と記

寛保三年九月八日

享保九年九月三日

幕府在治書院

中書在延行律因防身之記

御出仕組大目付守組 公右奥公政之助和統

改幕府

延享元年三月十日替の内形乃

こゝへ 廟堂及公儀とらへ 治書

延享二年二月六日名物書

延享三年二月某日法代路に

より事起り替へにらへり時服と
爲り

寛延二年四月五日上野園中書院

川後清用之入言きし是月十日
美全坂之傷し口月廿五日
淨福寺

宝曆六年正月三日死三十九歳

寛保三年九月八日

寛保六年三月廿七日卒

沖小性組右兵衛守組

桂之助 守備所

小栗信組 古分平之助之死

之助 長野主馬 廣路

宝曆六年七月廿日死三十一歳

寛保三年九月八日

天明三年三月廿四日

浄住祖之長子佐守祖

吉原井戸山師弘安

高柳伴治春子

中書信祖行陣因防之記

天明三年三月廿四日
老祥賜令
入永井監物之記

日年三月廿四日死七十一

寛保三年九月八日

元文四年三月二日

信長信房養子

小幡信組が皇太子に就

御成婚を奉るに依りて

政を在馬

天明六年二月五日老辭獨養令入永井監物に就

曰年秋弟地上總常陸水島より八

全量より一後を以

寛政三年八月日刻入膳田

安養寺より文記

寛政四年七月五日麻布公衛

橋乃大弟より一牛島口妻の

郵部大納言
寛政六年九月十八日死七十八歳

寛保三年九月八日

寛保元年七月廿日葬

河津性組大工佐守組

平内伝内盛妻茶屋子

山崎性組山崎新為子死

若菜若高山左衛門盛家

明和元年甲申四月廿三日葬入設樂基下而之祀

明和二年甲申四月十日葬仕

明和三年甲申九月三日葬仕

若水子

安永四年七月八日死享年

寛保三年九月分

寛保二年三月廿五日

海内利貞

少曾孫組長

御前組長 西郷

宝曆三年三月十三日

延享二年三月廿一日

右馬督宗武卿在老氏執事補廣元若凡
御出性祖阿部出主守祖 三宮依建部市十帝廣達

後三皇名 改氏部
内記

同日

宗武卿解を法をくくふむむむむむむ

り

宝曆三年六月廿一日海月五若名

まことのこを依りてまゝ

宝曆六年三月廿一日海月五若名

命をこ明の子年二月廿八日海月

美令^改と^揚九月^多の^帰り十月^多の^旨
淨^湯す

宝曆七年二月十日使番

口^年三月^六日^布衣^志と^名を^さす

宝曆八年正月十日^給序^入時^目手

と^てき^さら^るの^作事^す十月^多の^旨

美令^改時^腹と^揚十月^多の^旨

十月^多の^旨

宝曆十年正月十日^新時^番手

明和元年七月二日^大給^序定^番母^殿

或^部お^補氏^家江^後中^用と^名を^さす

九月^多の^旨時^腹と^揚時^腹と

揚^り十月^多の^旨明^の日^{より}病^ハ
あ^らわ^つた

明和元年十月九日^死年^三歳

延享四年六月三日

享保十六年五月廿五日

西丸内侍殿宗左衛門守亮

大御前御後守組

御小姓組御後守組

二言儀版定兵九而改考

後三言儀

後三言儀

口日百儀と記く是きまの作有

宝曆三年五月廿日

宝曆三年五月廿日

宝曆三年五月廿日

宝曆三年五月廿日

宝曆三年五月廿日

宝曆三年五月廿日

宝曆十二年壬午二月九日死年八歳

寛延元年庚午九月廿日

寛延元年庚午八月廿日奉旨

三木信中奉旨

中津信川勝左衛門死

中津信川出守守領 三木信中 織田然之而信方

宝曆十三年庚午九月廿日 中津信川

同年三月九日奉旨 中津信川

明和六年三月廿日奉旨 中津信川

明和七年三月廿日奉旨 中津信川

安永元年三月廿日

津守院君 中津信川 中津信川

中津信川 中津信川 中津信川

まきよりいへる法服美々好時服ニ
日威と傷り列々今言及と傷り法服
多つゝ法法迄のあり仲書使と
考元明の皇二月廿五日帰るは月
朔日法僧す

安永三年七月廿五日法先施氏

安永三年八月廿五日法先施氏

安永七年八月廿五日法先施氏

寛文元年九月廿日

延享元年正月廿日

寺名馬の廣長智恵

山名法徳寺南七の馬の死

法徳寺市川出書寺徳 子石 建部荒江而廣般

改 寺名馬の
法 大和寺

宝暦九年八月廿日法先施氏

法行秀丸の所方(國法同寺)とて書さる

作有る七月朔日法服美々好時傷り

三月廿日傷り八月廿日法僧す

明和二年八月廿日法僧す

日辛八月廿日踏者法同寺とて

書さるの作有る八月廿日法服美々

二時辰と楊の去月と自傳の去月
浮福す

明和の三年三月五日丙午
安永の三年三月五日丙午
令とくも日清道す
の皇極用と令とくも
四月日左の法は
考り

安永の三年三月十七日
安永の三年三月十七日
善くも作右
安永の三年三月十七日

如後と名するの
か

て明の三年四月十日
令とくも

口年四月八日
口年四月九日
三月二日
加後と名する

天明の三年四月十日

禁裏附と令とくも

口年四月十日
口年四月十日
口年四月十日

部目入

日辛酉月十三日 内日 弟了りしに 弟了り
作事し 凡国東よりして 七月の 弟了り
弟了りし 大和守にあり。

寛政元年七月廿日 弟了り

寛政八年三月十日

若君乃 弟了り 入 属 たりし也

寛政五年三月九日 老將 弟了り
寛政五年三月九日 弟了り 弟了り
廣興の 弟了り 弟了り 弟了り
弟了り 弟了り

寛延元年九月廿日

寛延元年八月廿日 弟了り

弟了り 弟了り

弟了り 弟了り

弟了り 弟了り 弟了り 弟了り

宝暦九年三月廿日 死

寛延元在年九月五日

寛延元在年八月五日

森川教馬後醍醐天皇

山崎信綱大雲寺住持

山崎信綱大雲寺住持

若君 森川全八后醍醐

改 教馬 信綱 山崎

宝曆元在年六月三日

同辛七月八日

同辛七月八日

宝曆十在年六月三日

明和元在年二月六日

若君の法方法を縁法續書の法方

候中へしし仰せ奉り

明和六五年七月十日西條の御出陣の御返格
同年三月六日御討に仰せ候御守段
安永六五年六月十日西條の御出陣の御返格
安永八五年四月十日西條の御出陣の御返格
西條の御出陣の御返格

天明元五年六月六日

若君の御返格を仰せし御出陣の御返格

天明元五年六月十日御出陣の御返格
西條の御出陣の御返格
御返格

天明元五年七月七日御出陣の御返格

實録
天明元五年七月十日御出陣の御返格
御返格
天明元五年七月十日御出陣の御返格

寛延元年九月廿日

寛保三年三月廿日

全帝治暎養子

少帝信祖行中周訪皇之死

御世祖市川出雲守組 五名 垣幸之而安周

改之也

寛政元年三月廿日死市川末

寛延元年九月廿一日

寛延元年八月廿一日

三右衛門貞長忠成

小菅清組川勝左衛門五郎

中津組市川忠兵衛

三右衛門 役楽源 忠貞一

改三右衛門

宝曆四年八月廿一日

寛元元年九月廿日

凡の屋舎甚多

山寺も信頼ありて公家も信頼あり

河内信頼市川出書云守頼毎初三言依井出甚く信頼の家

宝曆六年十月廿三日辰の候

不吉山羊居去所出果の如く

宝曆十年二月廿日死す

寛延元年九月廿日

寛保三年三月廿日

横濱市在明書院

山崎信坦探毒毒死

河津信坦市川出毒毒死 三信依口志野虎之丞明從

寛政元年六月廿日 祥入坪内或部生記

寛政元年六月廿八日 死古中書院

寛延元年九月廿一日

寛延元年四月廿一日

安部信重

山崎信重

山崎組市川出守守組 三信 安部信重

安部信重

信重

寛延元年十月廿一日

信重

寛延元年六月廿一日

九月五日百病不出候

寛延元年十月三日

延享三年十月三日

信玄公御書

出雲守組奥田八郎重隆御書

沖小姓組市川出守守組 菅原中務卿貞房御書

致書

天明七年十月三日死守九案

寛延二己年三月廿六日

佛小姓組市川出雲守組 三原龜井内記清永

注 三原 注 三原

佛小僧 井友平三郎忠丸春子

寛延三年三月廿七日 佛小僧 井友平三郎忠丸春子
佛小僧 井友平三郎忠丸春子
有之 恩賜 少ありて

日 年 十 月 二 日 佛 小 僧 井 友 平 三 郎 忠 丸 春 子
三 原 信 通 一 寺 也

宝曆元未年三月廿七日 佛小僧 井友平三郎忠丸春子
有之 日 年 十 月 廿 七 日 佛 小 僧 井 友 平 三 郎 忠 丸 春 子

二と揚るひ事も志らしく有る
宝暦二申年二月廿日大酌田本村
清後の村に引く時辰にと揚る
宝暦十年辛未月七日大酌清後の
村より又勢あつく時辰にと揚る
宝暦十三年辛未月廿六日小松川乃
より一遠遠志らふあり有村返日甚る
當年にとりまて時辰にと揚る
明和二年辛酉月辛酉清ら揚始の村
より連るく時辰にと揚る明の辛酉
百と揚るく其令にと揚る
明和九年九月朔日大酌山より

神事海福馬の法用と務め日市
當年にとりまて其令にと揚る
明和五年辛酉月辛酉清ら揚始の村に
連る明の辛酉當年にとりまて其令
にと揚る
明和五年辛酉月辛酉大酌清後の村
より連る時辰にと揚る
明和七年辛酉月辛酉清ら揚始の村に
連る時辰にと揚る明の辛酉當年より
百と揚るく其令にと揚る
明和九年九月朔日大酌山より
大酌山より

卯年七月廿九日
法用とそあへて内々

女水七酉年六月廿七日

卯年三月十六日
五月廿九日

寛延三年二月廿日

西元一七五〇年三月廿日

御出組市川右衛門左衛門

改孫四郎

宝曆十三年六月廿日

御出組市川右衛門左衛門

寛延三年三月廿日

河津組市川出守守組

大酒造極河津院高木屋河津組高橋屋

三倉儀高田若三而倍積

後五百石

後月為助

宝曆九年三月廿日 歸九百石

との三百俵の返一奉

安永三年三月十六日 死守守組

宝曆三年四月廿六日

宝曆二年三月廿五日

御中様御本多子御

二首依 神尾信直 道念

御勘定次第御書に
奉書如御本多子御

日御勢一内百俵と云々を以て

口奉九月廿日父幸之任定所へ至り

其後之書集を以てのこりて候事

右書右とく候れりて道念等

乃こり候事ハとて是も存置候事

宝曆三年九月廿日 御本多子御 御書未收出書後入

若知入候御本多子御

日別別の作よりつく道なき形に
唐来二言儀と流りて念記唐より
作あるも明の中事一貫唐より
事と名なきは海老岩川柳河の部と
作しき

日年二月三日布布柳河村より
三言儀の地より流り
明和元年八月廿三日敷江
寛政元年八月廿日宛布柳河

宝曆四年二月三日

宝曆四年二月三日

新加坡の長長長長
小書信廻り十八日宛

新加坡本番向守地 二言儀 阿部大膳山親

改主税

宝曆十年二月三日

日年二月三日法蘭西巡獲後を令

てしき七月十日中國のまゝと巡り

（まき作と名あり）

日年七月十日布布長長と名あり

宝曆十年八月廿八日法蘭西を令

及対股之相成と流り二月廿日と

三巡視子て廿月廿五日永川の歌とて
物りしと痛ひりて

宝曆十三年十一月廿三日於永川歿死
早業

宝曆十三年二月廿日

元文元年十一月二日

新多富の邊想从

中書信祖尙書内務丞死

御出仕組本多自向守祖 壬嘉名寅元方之御所知
以新多富

明和元年甲申年閏二月十六日大坂御園有

代りてと命せりき明の右年四月廿日

清服差令と改と揚り十月朔日陽り

清服中

安永元年丙午二月廿日陽使書

口年八月廿日陽使書
口年八月廿日陽使書
口年八月廿日陽使書

二時辰ニ過リて日ノ背向して浮揚す
日永三月廿八日布衣志と名をよむ

安永六申年四月十日東三番町那
自火より焼たれんが新居の事と

何ひに明の日は日光の照てまを
あふ河首連の目ふれ別

忠実の事といまむしあはれきり
なるともいふ新居よりい作也

いふいふ處安永いふいふいふいふ
日なりて五月朔日新居と名をよむ

安永七戌年七月十日河原橋
安永九年十月七日但野と名をよむ

天明元丑年正月十日西郷と名をよむ

天明三卯年三月十日新居と名をよむ

天明に在る年三月九日死す

宝暦己亥年三月某日

寶暦三年三月三日

新之助 滋養寺

山崎信重 岩倉

河津組本番向守組 子右 波多 保 節 義
政久 藏

明和二年四月十九日 松平内膳 啓
佐藤園山 (園山) 同 手 右 へ 書 せ 此
作 有 十 月 十 日 法 眼 美 全 越 越 越
明 和 二 年 五 月 十 日 法 眼 啓

明和己亥年四月十日 法使 啓

日 本 十 月 二 日 羽 別 山 形 檣 川 後
法 用 之 令 書 々 々 明 和 二 年 二 月

去日清服美令と揚す四月十八日
帰る物詣

明和五年六月廿一日初夜と云々
安永元年二月廿一日初夜と云々
安永二年四月廿一日死す云々

宝曆己戌年二月廿七日

享保十七年三月廿一日

御中世組本多白向身組 吉名 中園九郎表喬

西園寺の西利親殿
中書信組清田信重殿

宝曆十三年六月廿三日徳園巡見使と
合せし七月十日出立と巡視の
事に移り明の旨を旨に服美令
好時殿に職と移り白月奉見地と
せしりし中園の御遊り人等と七月廿三日
至り帰られし中園の事おし洋
詣ふかりり

宝曆十三年七月廿三日道奉行を
兼つきより傳書て定期を移しに
てし事なかりしや

明和二年七月廿七日又道奉行の事
為致美の七月を替りてし事
康福朝臣つし

明和十三年七月廿三日道奉行と
名きれし時辰と揚りてし切し
むらひら

明和十三年七月廿九日右の所後有
時辰と揚り

寶曆十三年二月廿六日老祥楊美を以て入る内初死

寶曆十三年七月廿三日致仕

口年八月廿三日致仕ありて是水々
りしむ

宝曆四年三月某日

延享元年三月三日

主馬徳満春子

忠告信直後信七左衛門

中山信直奉多日向守組吉名 佐野達次而満存

投字在卷

宝曆十三年三月七日大納言後乃

村長に列して時服ニシテ

宝曆十三年三月五日中野桃屋

にて大納言後乃

日辛十月三日大納言後乃村長に列して

時服ニシテ

日辛十月三日大納言後乃村長に列して

志方少将略一宿一初五日同月廿七日
菅中一白くして時股にとりて

宝曆十三未年六月廿五日兼清後の
射り小連して湯物にとりて

明和二年九月朔日東叡山小く
神事流福島の世居段と勢免四月

三日菅中に白くして紗後にとりて
明和四年四月十日流ら湯治の村

とに列して時股にとりて明の十二日
菅中に白くして煮合にとりて

明和五年二月廿日大前清後の村
とに列して時股にとりて

明和六年六月朔日流小世須与段

日年四月廿八日布衣志ととるて
天明二年六月九日死六十一歳

宝曆四年三月廿一日

宝曆二年八月廿一日

松岡清直御後成忠

忠孝信組御主服立

清直組本多日向守組 右名松岡八左衛門忠直
改清直

宝曆九年七月廿一日移入松本松本寺

宝曆十年七月廿一日元二平案

宝曆四年二月廿日

延喜四年三月四日

御性祖本多白向守祖之若三宅徳之而康英

改而康行養子

少當性祖令向之敬文記

宝曆四年四月廿日 跡村清俊

首々 猶如 及之 等々

同四年五月九日 跡村清俊 首々 明の十日

當中に百々して 若人令之 故之 等々

宝曆八年五月九日 跡村清俊 首々

明の十日 當中に百々して 若人令之 故之 等々

宝曆九年四月廿日 跡村清俊

有る瑞物と云ふ。

宝曆十一年辛酉月十二日瑞物清後

有る明の十三日嘗中（百と云ふ）

黄金と云ふ。

宝曆十二年辛酉月十二日瑞物清後有る

瑞物と云ふ。

口辛十月三日乙卯清後の村と列て

時辰と云ふ。

明和二年辛酉月二日瑞物清後有る

瑞物と云ふ。

口辛十月廿六日乙卯清後の村と列

して時辰と云ふ。

天明元年辛酉月廿一日清中世組と云ふ

口辛三月廿八日乙卯清中世組と云ふ

寶文二年辛酉月廿九日死中九氣

宝曆四年三月廿七日

元文元年十二月廿四日

伊織守信忠

出雲守信忠
出雲守信忠
出雲守信忠

明和七年三月廿三日

伊織守信忠

出雲守信忠

安永三年三月廿三日

伊織守信忠
出雲守信忠

宝曆己亥年三月五日

寛延三年六月二日

高松三男

山本庄田中

河津庄田中 高松三男

宝曆己亥年三月五日

の部

天明元年九月五日

宝曆八年二月廿日

宝曆七年十二月三日

御出仕根

千七百十
七
政

長忠

川

宝曆十二年四月

武列

墳

明和八年四月

信

七月

八月

安永七戌年二月十日法使書

御書所覽一紙ハ信之をさす事と
延き色安永七年四月十日信之を
のりおし名刺とつてし事なれ
随ひ来りし次明和八年七月十日
白根崎と稱し是名刺なりし
及卯の列よりくえの信りしなり
日永三月十日自布衣志と名すれ
安永九年二月十日大坂法使書
代りしと命をりし七月十日法使
書と名す獨り明の是年四月十日
信之は信りし

天明八年二月十日自布衣志と名すれ
安永九年二月十日大坂法使書

宝曆八年二月廿日

寛延三年二月廿日

糸之助恒隆参上

小菅信恒田中出羽守之宛

河内信恒若根去番五段組于五番之味向过之坐坐高

宝曆十年二月十日 藤入山口氏部之宛

明和八年二月七日 教仕

宝曆八年二月廿日

宝曆七年三月三日

市三郎忠貞

忠貞

市三郎忠貞

改在右

宝曆十年二月廿日

宝曆十一年四月廿日

宝曆十一年四月廿日

明和元年十月廿日

宝曆八憲年二月廿日

宝曆二年七月二日

中津組曾根玄蕃以組名合同強行而一

改考之

合同惣奉行並勝惣所

少當佐組横山日記文死

天明八甲年八月九日遠酒

同日存定所書きしこと七年以前あり

甲申臨と相田晴子あり方はあり

素は素ととを連そりて合ふ加

廻り筒室川等の賭の積負い

后々八幡子帝福清助帝谷合意

一統博奕之儀一山及首らる事

依りて是の如くもせしむるは
此後有利を得て家絶てしむる
心せしむる

宝曆八年辛酉二月廿日

宝曆七年辛酉三月廿日

沖小姓組曾根玄善次組 吉原 柳原合七而蔵利

海軍門蔵清忠次

小菅清組松平松馬次記

宝曆十二年辛酉三月廿日死軍案

宝曆八年二月廿日

宝曆七年十一月十二日

臣邦為奉詔曾無厭

中書信組今由三度子死

中書信組曾根吉書以組 三書名 陸光寺彈而為雪

宝曆七年三月某日 移入戸田彈而之死

寛政元年八月廿日致仕

宝曆八年二月廿日

宝曆六年四月廿日

御出仕組曾根幸善組 三善依橋幸彦幸房

大徳院房幸徳男惣辰

七善信組山台氏部幸死

宝曆十年在年四月廿日

安永二年四月廿日

安永八年七月十日

永井氏康守組

宝曆八寅年二月廿日

宝曆七年十月十六日家督

九節良惟熱所

山寺信祖松平於也死

山寺信祖曾根玄蕃以祖三信儀為家督忠次而良永

政平在馬

天明三年二月廿日老辭賜美卷二

松平信實信實死

口年九月十六日死七十一歳

宝曆八年二月廿日

宝曆二年二月廿日

平南長德忠臣

少后後親方内宿願守子死

所出後親方根書書以組三書保青山平南長視

宝曆二年二月廿日之物書

天明八年二月廿日群入曲内甲安守子死

口年二月廿日致仕

二月廿日正病不出候

宝曆八寅年四月廿日

宝曆七丑年二月廿日

丹多村平尾西加吉屋敷子

小倉庄組川口旅中子死

沖小姓組曾根玄蕃隊組八右衛門玄多村丹多村西房

改方一也

明和乙子年二月廿日死三子云云

宝暦八年九月七日

寛延三年三月廿七日書

御郵口付文倉ら輝勝忠氏
大御者御大膳忠臣

河内性組御役主事忠臣組 二百俵 以下 金御輝勝

後二百俵 後二百俵

旧日父布衣昭との御役主事連忠臣ら御書
登と合書しき勢の内百俵とありしなり
御所より

明和四年七月七日御書二百俵六百俵の
うち二百俵を給うは是の二百俵に
奉る

寛政四年三月廿七日御書御所御書

瑞初紅と瑞

寛政五年七月二日老待御兼全柱入法皇御後守より記

天化三宮年 月 日死 字三葉

宝曆十三年十月廿一日

宝曆元年八月廿一日

法皇御後守御

小菅待御田中

御後守御 天野長之而也方

安永九年三月十三日死 字八葉

宝曆十三年十月吉

宝曆十三年十月吉

河津庄田母屋守徳于吉若竹奉徳之而長景

改治

明和六年二月廿三日河津庄

日年三月六日布衣とて

明和八年三月廿日山形河津庄

道遠一より河津庄村と云はる

法前日百とて河津庄と云はる

安永三年四月廿日河津庄

馬子とて河津庄と云はる

とて湯物とて湯

安永九年二月廿五日迄の湯物と

今下とて湯

安永九年二月廿五日迄の湯物と

の料白根石と湯と四月迄は

目迄と湯

天明元年二月二日作とて湯

徳倉八と馬と湯と四月迄は

と湯

天明二年九月廿五日迄の湯

宝曆十一年十月十日

寛保三年十月廿五日

湯中組番丹後守組 千石 大徳長而忠救

拓高而忠長子

小徳長組山民部吉死

天明三年九月廿五日迄の湯物

の料と湯と

天明八年十月廿五日迄の湯物

の料と湯と

天明七年三月廿五日迄の湯物

と湯と

作

寛政元年正月八日法服奉令拜
以服三枚成之儀、二月廿七日、
寛政二年正月廿七日、
寛政三年二月廿七日、

日辛未月辛未日布衣奉令と免す

寛政七年二月廿七日、
寛政八年正月廿九日、

日辛未月辛未日、
日辛未月辛未日、

日辛未月辛未日、
日辛未月辛未日、

宝曆十二年十月十六日

宝曆十三年二月廿七日

御心性坦率、丹後守坦吉、若小、東後、御持、

経直御持、廣徳、兼祖

後法守持、賢、兼祖

中書、法直、白、法直、兼祖

日辛未月辛未日、
日辛未月辛未日、

日辛未月辛未日、
日辛未月辛未日、

日辛未月辛未日、

日辛未月辛未日、

若壽、娘、若乃、官、侍、

若壽、娘、若乃、官、侍、

若壽、娘、若乃、官、侍、

日辛巳月廿三日、奥向川舟に被りて
作行り

日辛巳月廿五日、人神の事あり
柳東名を揚めて、大船陽をかく福

明和元年四月廿三日、子多の事あり

涉後舟持易もそ、利に刻し、福物

死と福、明の世に百とて、時辰と

福

明和元年六月十日涉行記

日辛巳月廿七日、賭る涉後舟の

六日百とて、時辰と福

日辛巳月廿八日、布衣とて、多きり

明和二年九月、習東、敵少あり

神事、流福馬、法用と、勢あり、口十二

百とて、黄令、校、時辰と福

明和二年、流福馬、繪、花、秋、里

一に九月、二日百とて、黄令と福

明和二年、六月六日、新、法、著、記

安永二年、三月十五日、賭る、涉後

明の世、百とて、時辰と福

安永二年、四月、日光の、法、法、陸、八

安永二年、五月十日、布、衣、三、千、九、百、八

宝曆十一年十月五日

中三可寛福海壽祖

由仁可敬春皇

再勅 出雲後祖 恒常言傳也

所出恒祖 昔言 略至 世而可利

明和七年 八月廿日 北平所の郵致

かき

安永二年 八月廿日 死 三十七歳

宝曆十二年十月十六日

宝曆十二年二月四日

山内清直 著 丹波守 直 吉 石川勝全 敬而文定

市橋守氏方 謹啟

山内清直 謹言

宝曆十二年十月十六日西予東より一
道遠しゆふ新作と云ふ山内清直
松栗毛那る法馬少く桑馬山内清直
明和の年三月九日府内より一紙を
名をれ相列座倉へ温泉より浴する
法服と云ふ明の十日亥戌之注是日
之と云ふ彼温泉より浴一六月三日也

天明元五年二月十三日後の御教を兼
馬御後の事あり

天明二宮年九月某日頃の御教一紙
ありし時御教は候しそ自作あり
字はとりし思鹿毛のさうく、兼馬
御後あり

寛政四年四月廿三日元

御官御長御入洋ん事と候ひしに
免さるる作古日と御御御御
候しし此月廿三日と云候御あり
御官御長御入洋ん事と候ひしに
候し

宝曆十三年十月十六日

宝曆八宮年九月三日奉替

御出仕組御長御入洋ん事と候ひしに
音三尋山年廿三日御長御

紀伊守雅摠御長
出仕組御長御入洋ん事と候

安永六年九月晦日辞入大膳之奉仕

天明元五年十二月廿日致仕

宝曆十二己年十月十六日

宝曆元年十月廿一日

孫四郎信武惣介

山崎信組古故之孫子也

河小姓組葉田丹後守組 山崎 山崎 進信 救

後

小膳 十左衛門

安永二己年二月九日 辞入 神尾 右衛門 守之丞 死

宝曆十三年十月十六日

長門守定良親房

宝曆三年十一月廿九日

出雲守信恒

河内守恒業 丹波守恒三 信長 大野九門 定言

改年帝

宝曆十三年十月十四日

河内守恒業

明和六年十一月三日

明のころ

宝永三年三月某日

宝永四年三月十日

改随と云又改く

宝曆十二年十月廿一日
宝曆十二年二月廿一日

寛保三年三月廿一日

津山性組 兼 丹波守組

公名 津山権 勘助
改 改 改

天明七年三月廿一日 移入川勝権 勘助

寛政三年七月廿一日 小川町権 勘助

五つの郷 麻布公 街橋の火災にて

難大日なり

同辛九月朔日 小川町権 勘助

郷 津用 勘助

一して 四つ 各 町 長 勘助

地^の土^の百^の俾^のと^の流^のる
寛政九年九月十五日致仕

宝曆十二年九月廿日

所奉行裁布年^の字^の惣^の取^の

佛^の性^の祖^の楚^の南^の丹^の陸^の守^の但^の三^の景^の儀^の公^の石^の尾^の胎^の正^の延^の

改^の左^の月^の
長^の三^の而^の
伊^の藤^の守^の

明和元年申年閏三月九日^御中^奥陸^南

明和元年閏九月廿日^御中^奥人^取

曰^の年^の十^の月^の廿^の日^の自^の父^の執^の事^の守^の字^の宿^の八
少^のく^の引^の籠^のり^の如^の何^のい^のき^の有^のて^の上^のに
之^の先^の可^のく^の又^の父^の曰^の役^の係^の留^の事^のを^の以^のて
い^のき^の有^のて^の引^の籠^のり^の居^の事^のは^の長^の三^の而^の

正延川の渡次、嗣子保備手、帝政峰
際也、お人分とあるを、せし、大男の形、
少くとも口心と指揮して、消防の事
と司るべき、作と書中にも、
阿部伊豫守、平右衛門、
分を、して、又、
揚、日出、消防の事と、
指揮す。

同辛酉二月十七日布衣志とあるを、

明和六年三月十日、
辛酉三月十日、

同辛酉七月三日、

る事とあるは、是と、
防の事、に、
古くも、
他、

明和六年三月八日、
之、

明和七年二月三日、

明和七年三月十日、

安永元年二月十日、
大男として、
か、

天明二年八月廿九日
切又むらひ強ひて其令討つて
く〜部々ゆめ

天明四年七月廿七日
天明己年痛ひまてつたふし
七月十二日卒五十八

宝曆十二年九月廿八日

御小姓組番田丹後守組三景儀書後御右馬惟徳

後和名書
大和書

安永元年四月廿七日
西九中人氏

同日宣上三月廿七日
安永七年四月廿七日
御國書

安永八年二月廿七日
若菜院君乃清葬送の清用と命
と〜連四月廿二日世清用と書

とて何服と云はる。

安永九子年二月九日東海道川
津藩より用之命を賜ふ。三月三日
美濃郡河原三浦殿より。三月
十日御用取留。廿日川原切之免
後以て美濃郡と云はる。

天明四年四月七日加納藩より之旨
御旨の御入を以て去。高日佐野
吉徳の政言堂にて田沼山藏守
意知より御用之命を賜ふ。御用
取留。三月廿二日御用取留。意
知御用取留。三月廿二日御用取留。

冬一に等し。御用取留。御用取留。
御用取留。御用取留。御用取留。
三月六日免さる。

天明七年十月廿六日御用取留。
御用取留。御用取留。御用取留。

曰年十月廿六日
種娘若紀藩より御用取留。御用取留。
天明六年九月十日

公方様御用取留。御用取留。御用取留。
御用取留。御用取留。御用取留。

曰年四月十九日東叡山
大猷殿

歳首奉祀

新清廟建つ事

河室塔清造之乃清用と命をさす事

日奉国十月三日

後明院殿御新奉或も追福の清用と命

〜〜時服之と命

天明七年二月廿三日勅命 清用奉祀

社司 文澤字 河原惟孝 清心路奉祀

日奉二月廿三日御身は御奉和奉と改

日奉二月廿三日源光山王の社と改

〜清用と命をさす事

日奉九月七日

將軍 宣下の形ありと改

事と改〜〜時服之と命

日奉三月廿三日山王の社と改

清用と命〜〜美命は時服之と命

天明八年九月廿三日

禁裏清新向を造と改〜清用を命

事と改〜〜常格なる改

事と改〜〜明の

實政元年二月廿日御身は

清用と命は丹波と忠意御身

御身は美命は時服之と命

日奉七月廿三日九月廿日

御新と造る事も心とて一々
三月廿七日藏大臣御侍も賞受相
乃官合へ古くもて祓夜

御新向と造る事も心とて一々御用凡積る
中々吟味御侍諸棟梁侍有八等へ
判指と申す一々にお成り一々
心とてを一々取小とて為座の觀
賞と一々賞合に時服とて御り
明の丙午三月十日申場より京都と
三月廿日迄小忌

寛政二戊午七月廿九日家督八百石是迄の
三台儀ハ父老と古く御り相も御り

日事廿月廿日迄とて事多路に
紙とて廿月迄迄とて廿月十八日

御新向御造る事も心とて一々
皇居も古くもて祓夜の御造置に切り
禁裏より三月花鳥御鑑言相二重と
御り

如院より紅白紗後とて一々御
仙洞の後御新とて一々御新御
御新御新とて一々御新御新と
三月廿日迄迄とて

神苑と拜一々御新御新とて一々
相傳と御新

禁裏

御所向と遣しきりし御用之替り
事と感し給ふ所りして其令は
と給ふ。

寛政三辛酉二月十九日松平將軍より
定信相臣の部へ召されて西境の互換
と許さるる事と仰よめしに爲行
と申しに御所へ参りて其旨を
志以陳滿り参りしに宛向(か)り参り
ありしに御所へ参りしに御所へ
参りしに御所へ参りしに御所へ
参りしに御所へ参りしに御所へ

以ハ三令を以て罷遣りしに御所へ
御所へ参りしに御所へ参りしに御所へ
参りしに御所へ参りしに御所へ

寛政三辛酉二月十九日御所より

御所より御所へ参りしに御所へ
参りしに御所へ参りしに御所へ
参りしに御所へ参りしに御所へ
参りしに御所へ参りしに御所へ
参りしに御所へ参りしに御所へ
参りしに御所へ参りしに御所へ
参りしに御所へ参りしに御所へ
参りしに御所へ参りしに御所へ
参りしに御所へ参りしに御所へ
参りしに御所へ参りしに御所へ

實政公在年二月八日琉球人事務局
出用と令を下さる

同年三月十日官中にて若女心
氏教相長作を伴つてききの琉球
人音楽の折三曲所と云曲所
を琉球人に令歌を免兼忠の
至るも相長も思言所前出の事を
止るも四月九日多き事し三月は及
琉球人事務局の出用を暫く
何故と云はる

享和二年三月朔日御奉行
同日是の如く勢の目にも石のまに

以下と若女心氏教相長作
文化二年三月朔日御奉行

宝曆十二年九月廿日

河内守改職部西伴明喜子

河内性組並高丹後守組

三百信 山本次郎八勝明

後景信

後職部

明和元年十一月十七日強村清徳首て
此の十八日當中に召されて幕下と稱す

明和二年十一月十日又此事清徳首て
海黄棧敷と稱す

明和四年九月八日又同業清徳首て
吾柄棧敷と稱す

明和五年十一月二日又強村清徳首て

兵柄様多に之揚。

明和七年十月朔日臨村浦後首々

明乃三日當中に古きて黄令に之揚。

安永二年三月廿又社業浦後首々

縮酒様多に之揚。

同辛七月廿日海月宮儀行是まて乃

三音信八返一奉。

安永三年十月十二日小宮のまて入

道遠志の少打隔田川のて小鴨村を

同月廿日當中に古きて時股之揚

同辛十月十八日臨村浦後首々此の九日

當中に古きて黄令に之揚。

安永四年四月廿日臨村浦後首々

縮酒反之揚。

安永五年八月廿日御膳奉行

安永六年三月廿日古不之揚

一々替りて黄令に之揚。

安永七年三月廿日事にて黄令

に之揚。

安永八年三月十九日一々少々

黄令に之揚。

天明元年三月十八日一々少々

黄令に之揚。

天明二年三月十六日一々少々

寛令二と揚

天明二年辛三月廿六日同一事

寛令二と揚

天明三年辛三月十日同一事

寛令二と揚

天明四年辛三月廿日同一事

寛令二と揚

天明五年辛三月十七日同一事

寛令二と揚

天明七年辛三月九日同一事

寛令二と揚

天明八年辛三月九日同一事

寛令二と揚

寛政元年辛三月六日同一事

寛令二と揚

寛政二年辛三月九日同一事

寛令二と揚

寛政三年辛九月十五日同一事

天明四年三月廿日同一事

寛政四年三月廿七日同一事

天明五年三月十七日同一事

天明七年三月九日同一事

寛政五辛三月七日一書あり
黄令と楊と

寛政六辛三月三日御膳奉行御
初座しとて白根村と楊と

旧年三月九日在ふととて
ゆととて黄令と楊と

寛政七年三月六日一書にて
黄令と楊と

寛政八年三月廿一日一書にて
黄令と楊と

寛政九年八月十七日

若君の書御筆懐かすしとて

御膳奉行の事ありとて
白根村と楊と

旧年三月廿一日一書にて
勢也ととて黄令と楊と

寛政十年三月廿一日一書にて
黄令と楊と

寛政十一年三月廿一日一書にて
黄令と楊と

寛政十三年三月廿九日二所書あり
旧日布衣ととてととて

文化二年 月 日死す

宝曆十三年辛丑二月十日

御書院若侯侍播磨守祖又平而長寛齋
清中性祖水野内膳頭 三音儀坊又系長歎

後音名

明和元年十月八日御書院若侯

三音儀坊一奉旨

明和七年辛酉二月十日御書院若侯

宝曆十三年三月十八日

河内住但水野内膳心組

西飛津書院為替目大和智組書院長熱所
三音後同部津中節給書
後書
後書

明和二年三月十日を物書

明和三年三月三日跡目あきあき石

是との三音後ハウア一トモ

天明二年四月十三日三音國金屋部

津島村の屋地清用あき一にて給り

六月三日又清用あき一にて伊豆國

若澤郡平谷村の屋地も給り

同辛八月三日五知の代地として下宿園
お馬郡 赤毛村として下宿園

天明二宮年十一月十八日死年三三

宝曆十三年十一月十八日

伊出地水野内膳頭

西尾内書院若石豊若守地延篤 合群惣所
三宮依 金田江左而茂源
後延篤

明和六五年十一月十九日西尾の
村より不運して時服ニと揚る

天明元年四月廿一日又其の事として
延篤の料付として六邊編と叙る

寛政元年十一月廿九日祥入松平信隆守と死
寛政三年七月廿七日致仕為米と云
寛政六年二月十日死年三三

宝曆十三年十一月十八日

河内性祖太郎内膳通

西尾山書院書面を以て手祖信成旨蓋書

三原口忠田与助首一

後之右

後信成

安永四年九月廿七日右の法後の村
に列して時辰ニと儀

安永五年八月二日右の村を
りしとき年の法并りして輕轉村
為り月七日言申に右の法後ニと儀
同年九月十三日右の法後の村に
列して時辰ニと儀

安永八重年三月三日奉旨
是との三番係うへし奉る
天明三重年九月七日漢の法殿へ
漢の事候也
漢の事候也



